

子どもの生活課題から授業を創る

上野山 小百合（関西大学非常勤講師）

1. 子どもたちの状況

2020年3月から子どもたちも大人も今まで経験したことのない大きな災禍に遭遇し、生活が一変しました。窪田学級の子どもは、臨時休校明けに振り返りでこう書いています。

■私は正直自分がコロナにかかって死んでしまうのではないかと不安でした。だから家でもマスクをし、手洗いをめっちゃしました。怖かったです。でもかかってしまった人は、病気もこわいし、いじめなどされるんじゃないかなどの怖さがあり、相手のことも考えないといけないと思いました。（中略）近くにコロナがきているのは確かなので、これからもコロナ対策（手洗い・マスク）をやっていきたいと思いました。

（6年）

この子は、家でもマスクをして生活するぐらい不安だったのです。大学生も不安の程度は個人差が大きいですが、ストレスが長く続き心の病になってしまった様子が授業前のレポートに書かれていました。

■友達に会うことや、学校の行事に参加する等が無くなった。その為、家でずっと過ごす日々が続いた。家族全員、コロナに対しての意識が強かった為1歩も外に出ずに過ごした。その中で私は家族や友達と話す機会を作らず、うつ病になってしまい、窓から差し込む陽の光さえあたるのが嫌になりシャッターを下ろすまでになった。コロナの影響は精神的にも関わってくるものであり、恐ろしく感じた。それだけでなく、周りもコロナに敏感になり、マスクをしていない人がいるとその人を菌扱いする人や、マスクを買い溜めしマスクを持ってない人を困

らせる人達が見られた。アベノマスクがそれぞれの家庭に配布されたが、マスクは小さく、配布されるのが遅いと感じた。こう言ったことから、政府の対策が十分にされていない、人々の関わりが差別化する所も現れたので日本の社会は良くない方向に進んでいると感じた。

この他にも、「生野菜を食べるのが怖い」と書いた学生もいました。「コロナの情報は多いが、どれを信じていいかわからず、ニュースを見るのもいやになった」のように情報の渦に飲み込まれ、正しい判断ができなくて不安を感じている学生も多かったです。

WHOによると、世界では毎年約80万人が自殺しています。これは40秒ごとに1人が自ら命を絶っている計算になるというのですから驚きます。WHOはさらに若者の死亡の主要な要因の1つが自殺と指摘しています。日本ではコロナ禍で子どもたちの自殺が大幅に増加し、2020年に自殺した小中高校生は479人にも達し、過去最多となり衝撃を受けました。

アメリカでも、コロナ禍で若者がうつ病になるリスクを調査しています。ウォール・ストリート・ジャーナルの2020年8月12日付の記事によると、アメリカ大学保健管理協会（ACHA）などが昨年3月末から5月にかけて学生1万8764人を対象に実施した調査では、大学生の約41%がうつ症状があり、自殺のリスクも2019年秋の25%から27.2%に上昇したという報告でした。日本は、子どもの7人に1人が貧困です（2020年）。コロナ禍で親の失業や収入減の影響、自粛で家にいる時間が増え、虐待の件数や子育て相談件数が増えています。子どもや大学生の心の病につい

て問題意識を持ち、詳しい調査や対策をとることが必要だと思います。

2. 学校は、仲間と交流し発達するところ

学校（大学）は、子どもたちの発達にとって、とても大事なところであることが以下の感想によく現れています。

■学校は楽しいけど、昼休みや中休みがあんまりあそべないからいやだけど友だちとちょっとだけ話したりできるからうれしいし、おたん生日がかりやあそびがかりがあるから学校は楽しいです。学校でつくえがくっついてほしいけど、1mあけてすわっているからさみしいけど、楽しくじゅぎょうができるから楽しいです。

（小3）

■自分たちの生活が不要不急なもので成立している（キャンパスへの通学、サークル活動等）ことと、不要不急なものが人間生活の中で失われてはならないということを知った。（大学生）

■コロナを経験して学校の大切さを感じました。今までは「学校に行くのがめんどくさい。勉強したくない」と感じていましたが、コロナの自粛期間学校に来れなくなった時に、外にも出れないし友達にも会えないので学校に行きたくなりました。また、オンラインの授業が増えて課題がたくさん出てパソコンが苦手な私は、とても苦戦しました。課題の内容で分からないことがあったときに、すぐに先生に質問など聞くことができないので大変で不便さを感じました。学校に行き勉強するほうが先生とのやり取りができたり直接話せるので分かりやすいと思いました。（大学生）

3. 子どもの生活課題からつくる授業

以上のような子どもたちの声を聴くところから授業は始まっていきます。子どもたちの生活において最重要課題は新型コロナです。

遊びや活動の制限、マスクや消毒、ソーシャルディスタンス、黙って食べるなどに、強いストレスを感じています。下宿暮らしの大

学生は、オンライン授業で大学にも行けず自粛を強いられていました。

まず、こういった辛い思いを教師が聴き取り、子どもたちの集団で出し合って、みんなが同じ思いだと知ることだけでも安心につながりました。大学生も、コロナに関する事前レポート課題を授業で紹介すると「みんなの思いを知って、自分だけじゃないと安心しました」「今回の授業で、クラスの人々のコロナに対する思いを知ることができたのがよかったです」と書いていました。

子どもたちは、小学校1年生でも新型コロナに関する情報を家の人やメディアなどから得て、多くの知識を持っています。それを出し合いながら、議論し「正しく怖がる」ために、大人から言われて従っているマスクや手洗いなどについても、その意味を学ぶことで、安心し主体的に行動することができます。

窪田実践では、「新型コロナの『新型』ってなぜ新型というのか」を学ぶことで『『だから新型コロナって言うんだ』』といった反応が返ってきた。10年以上前に大流行した新型インフルエンザも仕組みは同じである。言葉の意味を知るだけでどこか安心した子どもの様子が印象的だった」と振り返っています。

大学生もマスクについての記述が多かったので「なぜマスクをするか？」を話し合いました。このように生活の中から学習課題を設定して学び合う授業が学びを深めます。

マスクの隙間とウイルスの大きさの関係を理解し、飛沫感染がリスクが高いこと、無症状の人が感染を広げること、若い人は重症化しにくいけれども高齢者や持病がある人は致死率が高いことを学んだ上で「なぜマスクをするのか？」に戻って考えます。マスクは自分が新型コロナにかからないためだけでなく、人に感染させないために有効であることに気がついていきます。マスクは、自粛警察やマスク買い占め、アベノマスクの問題にも繋がります。科学的な知識を学ぶことを土台にし

て、生活を科学する力が育っていき、コロナで不安になっていた気持ちを乗り越えていったように思います。

■「知識」：コロナが出てきたせいで外出ができなかったり、休校になったりしたけれども、コロナのおかげで気づいたこともあります。それは、当たり前の日々の大切さです。今の生活の一瞬一瞬の時間がどれほど幸せか実感しました。ぼくは、この学習を通してコロナがどういうものか、どう対策すればいいかわかりました。これからは、この知識をいかしていきたいです。（6年）

4. Think Globally、Act Locally

「地球規模で考え、足元から行動せよ」

新型コロナは、身近な生活の課題ですが、世界中で起こっているパンデミックなので「Think Globally」に適した教材だともいえます。子どもたちからは、「本当に中国がわるいのか？」「世界中の感染者数とコロナが治った人の数は？」のように、世界に目を向けた質問がでてきました。大学生は「なぜ日本は、外国のようにロックダウンをしないのか？」「PCR検査の数が少ないのはなぜか？」のように外国と日本を比べて考えていました。

窪田さんは、こういう子どもたちの疑問に答える学習内容として「ベトナムのとりくみ」を最後の時間に紹介しています。フック首相の「**経済をある程度犠牲にしても、国民の健康と生命を守ることを最優先に考える**」という呼びかけや、文化・スポーツ・観光省が一般のアーティストからコロナ撲滅を訴える作品を募集した「プロパガンダアート」やミュージシャンの替え歌をなども紹介し、学級でもポスターづくりに取り組んでいます。

大学生では、グループで新型コロナの指導案を考えたり、看護師の母親に取材するなどの「足で稼ぐ教材」を模擬授業で発表しました。これらの活動は、いわゆる「動き出した子どもたち」と呼んでいる子どもたちによる

「Think Globally、Act Locally」の活動です。自分たちでもみんなの幸せのためにやれることがあると自覚して行う活動は、子どもたちを発達させます。

淡路島の岨学級では、新型コロナの学びで自信をつけた6年生が実行委員となり、中止になった運動会の代わりに、自分たちでしっかりコロナ対策をして「神代祭（くましろさい）」を行っています。

また、「感染症の歴史に学ぶ」という視点も子どもたちの視野を広げ、今のコロナ禍を未来に活かす財産として捉えることに繋がります。窪田学級では、感染症と闘ってきた歴史を学び、その教訓が今の感染対策に活かされていることを学び、こう書いていました。

■「コロナって?!」

昔すごい感染症が流行ったみたいだけど、今はないのでいつかは収まるんじゃないかと思います。まず、地球のみんなが一丸となってみんなと助け合いながらコロナを収めていきたいです。私たちは働けないから役に立てないけど、コロナにかからないでいるのが少しみんなの役に立つんじゃないかなと思いました。コロナの勉強をして、もっと私にできることを考えたいです。

5. 対話の授業がなぜ子どもたちを変えるか？

生活課題から授業を創る授業では、子どもたちが大きく成長することを感じます。

コロナ禍で初めて行った大学生の実践で、コロナ問題を教材にしました。6年生と同じスタンスで対話の授業を意識しました。対面授業ができず、Zoomなので表情もわかりづらく苦労しましたが、最初は不安や攻撃性の強いレポートを書いていた学生が、仲間との学びを通してどんどん変わっていった姿に感動しました。詳細は自費出版の『コロナに負けない教師と子どもたち—対話の学びで未来を拓いたコロナ禍での健康教育実践集—』を参

照ください。健康教育の対話の授業で、学生がなぜ変わったかを4点に整理しました。

①授業の前に、コロナ禍での個人の思いを文章化して匿名で公開し、学生同士の掲示板で実名での対話をすすめたこと。

最初のレポートは、ネットやテレビの情報をそのまま引用したものが多く「擬概念」(ヴィゴツキー)(『思考と言語』5章)でしたが、授業や仲間との意見交流で、擬概念が概念になったのだと思います。ヴィゴツキーは、概念の発達は、「物事の本質を知り」「他者を知り」「自己を知る」と述べています。この授業での対話が、概念形成だけでなく、他者理解・自己理解に繋がったのではないかと思います。

②対話の授業の前提として、新型コロナに関する情報を積極的に集め、学生の問題意識や疑問に合わせて、資料を厳選して提示したこと。

コロナ禍で、情報は日常に溢れていて、学生も多くの知識を持っています。私が伝えたい内容を先に出さず、学生が知りたいと思うことを取り上げることで、主体的な学びを引き出しました。その学びを交流し、仲間から学んだことに刺激を受けてまた、深く学んでいくという連鎖が見られました。

③学んだことを自分の中にしっかり納めて表現する活動に取り組んだこと。

感染予防の知識を身につけ、教師としての指導案作成や授業のスキルアップだけをめざすのではなく、感染症や社会の見方が変わり、学ぶことの充実感を感じてくれたらと思って、取り組みました。指導案は、概念を自分の言葉でしっかり書き、模擬授業も感染症の基礎的知識をきちんと押さえ、伝え方を工夫して個性が溢れていました。模擬授業の受け手も自分たちでこんなのが作れたという達成感を持っていました。仲間と動き出す中で概念を

自分のものにしていき、自分の成長を実感し、自分も社会の為に役に立てるという主権者意識が高まったのでしょう。最終レポートは、自分の言葉で書き切っていました。自分や社会を客観的に見つめ、「コロナのおかげ」という言葉も多く、マイナス面だけでなくプラス面を書いている学生が多く、コロナによる不安な暗い気持ちを昇華させたのではないかと思います。小学校ならポスターづくり、新聞づくり、自分たちで行事を創る活動などができると思います。活動が出来ない時は、親子や友だちと「鉛筆対談」をするのも、学んだことを表現する活動として意義があると思います。

④「健康教育」という人の命や生き方がテーマの授業で、人間関係が深化すること。

健康教育では、子どもたちや同僚、研究仲間いつも深いところで繋がっていると感じていました。不自由なオンライン授業でも、1人ひとりと深く繋がれたと感じました。そしてコロナの対話の授業はコロナ禍で学生達が必要としていた学びであったのだと実感しました。健康問題から社会問題を学ぶ授業では、希望が持てる教材を探すようにしてきましたが、この実践では、足で稼いだ教材と模擬授業や最終レポートに未来への希望を感じました。

6. 自前の教育課程づくりを

コロナ禍という過酷な状況においても、子どもや教師の思いを無視して詰め込み教育、管理教育が行われている学校が多いようです。

子どもの生活課題から出発する健康教育の実践は、教科書にあるからするのではなく、自前の教育課程づくりです。教育の自由を取り戻し、子どもたちの思いに寄り添い、発達にもつながる実践です。残念ながらまだコロナ禍が、続きそうです。コロナ禍だからこそコロナ実践に果敢に取り組んでいきましょう。